畑の山の麓に善兵衛という一人の若者と老母が住んでいた。祖父善知の代は畑銀山も盛大であつたが、今は休山となつていた。

善兵衛の母は病を得て長く床に臥していた。善兵衛はあれやこれやと看病をしたが母の病は一向によくならず、少しの貯えも今は尽き、その日の生活にもことかくありさまとなり、母に薬を与える金もなかつた。

全く困りはてた善兵衛は、この上は神仏の御力をかりるより外はない、一つ米ヶ森の南海に願つてみようと思い、南海の庵を訪ずれた。南海は善兵衛の話を聞きそれはかわいそうだと思い、祖先代々何を信仰しているかを聞いた。善兵衛は「はい、観音様を祀つています」というと、南海は「では先ず、観音様に願つてみよ、若し利生なきときは米ヶ森権現に取ついで進ぜよう」という。善兵衛も、自分の家で祀つている観音様に願うのが当然だと思い、厚くお礼をいい帰り早速そのことを母に話し、観音堂にこもり断食をして祈願に入つた。

そうして日は流れ、早や満願の日となつた。その日、午後より降り出した雨は夕方より篠つく大雨となり、全く鼻をつまれてもわからぬ程の暗夜となつた。それに加え寒さもひどくなつたので、炉に火を焚いて暖と明をとり、真剣に最後の夜の祈願をつづけた。ちようど丑満と思われる頃、麓の方で何か大声で語りあう声が聞え始めその声はだんだん近づいて来た。善兵衛は今頃誰だろうと思つていると、まもなく何れも腰に大刀をさした荒々しき男ども五、六人がどやどや入つてきた。なかには大きい荷物を背おつたり持つたりしている者もいる。さては盗賊と思いだまつて祈願している中の頭目と思われる男が、割合ていねいな言葉で少し休ませてくれという。善兵衛は立ちあがつて薪を運び火を盛んに燃やし、白湯を与えたりしてまた元の位置に帰り祈願を続けると、また頭目が声をかけ「その方は、こんな夜ふけに何事を祈願しているのか」と問う。善兵衛が「はい、老母が病気で長く臥し、薬など与えたいとは思うが、貯えもない貧しさ故、ただ神仏に救つていただきたいものと思つて」と七日七夜の祈願をしていることを話した。雨にぬれた着物などを干していた荒くれ男達もその話を聞くといたく感心したのか、頭目を中心にして何事かひそひそと語り合つていたが、「これ善兵衛とやら、我等はみらるる通り故郷も親も捨て、人家に押し入つては人を殺したり、金や物を奪う盗賊、今の話を聞いているうちに本当に悪い事を続けて来たと思いあたつた。これは少しである が、私達の罪滅しと思つてとつてくれ」といい、晶紗に包み重いものと、一人が背負つてきた荷物を善兵衛の前に置き「さあ雨もはれあがつたようだ、おかげで衣類も干せた、ではよく老母の面倒をみて早く病をなおしてやつてくれ」とやさしくいい、観音様にむかつて合掌し、もと来た道を下つていつた。

やがて夜もほのぼのとあけ始め、七日七夜の祈願も無事終えることができた。だが先程盗賊のくれていつた物が、なんとなく底気味悪く思われてならないので包をあけてみると、皆真新しい衣類にして、母に着せると良く似合いそうなものばかりであつた。また晶紗の包を開いてみると、それは驚くばかりの銀子であつた。善兵衛はあまりの金額に驚きどうしたら良いものかと途方にくれていたが、南海に話してみようと思い、庵に急ぎ、昨夜の件をこと細かに物語つた。南海はそれを聞き終え、「それは誠によかつた。きつと観音様がその盗賊をわざわざ招いてくれたのだろう、安心していただいておき、早く帰つて母に孝養をつくせ、その盗賊達もきつと心を入れかえ善人になることであろう。因果応報といつてよい行為した人には良い報いがくるものだ、めでたい、めでたい」と手を打つてよろこんだ。善兵衛はその金で薬をかつて帰り、母に今までの話をして二人で嬉し涙にくれた。母の難病も手厚い看病と高価な薬のおかげで、ほどなく全快し楽しい老後を送ることができたという。